

# Temperance Narrative の物語学

森岡 裕一

アメリカにおける禁酒の話題となれば1920-33年の禁酒法に関心が偏りがちだが、酒の消費量がピークを迎えたことに比例し、禁酒運動がもっとも盛り上がりを見せたのが実は19世紀前半であったことはもっと注目されていだろう。それぞれローカルな運動を繰り広げていた各地の協会が大同団結してアメリカ禁酒協会を設立したのが1826年、そのころから、醸造酒には甘い態度を示していた節酒(temperance)運動が、実際には全面禁酒(total abstinence)運動へと転向することになる。

当時の禁酒運動のなかでも影響力の強かったのが、ワシントン運動である。これは、1840年、ポルティモアの居酒屋に集まった酒飲み6人が我が身を省みて禁酒の誓いを立てた(take the pledge)ことに端を発するが、それまでの禁酒運動とは違い、大量飲酒者自らが改心し禁酒運動に乗り出したことが画期的であって、たちまちのうちに仲間が増え、翌年には10万人、さらに2年後には50万人に達したと言われている。運動自体は短命に終わったものの、今日世界中で活発な活動を続けている「アルコール依存症者匿名会(Alcoholics Anonymous)」の先駆けとみなしてよい。彼らが自らの協会に初代大統領の名を冠したのは、ジョージ・ワシントンが英国王ジョージ三世の圧政からアメリカを独立へと導いたように、彼らを「アルコール王」の支配から解放してくれるという願いを込めた命名だった。

ワシントン運動が短期間に成功を取めた要因のひとつは、temperance narrative と呼ばれる一連の文書が大量に出回り運動の普及に大いにあずかった点である。このタームは狭義には改心者の禁酒体験をつづった語り物を指し、禁酒体験記と訳せる。だが、それらは事実に基づく自伝的文章である場合よりも、むしろ多くはフィクションであり、純然たる禁酒小説(temperance novels, temperance

tales) との線引きすらしばしば困難であって、両者を含めた広い意味で temperance narrative を禁酒物語と理解しておくのが便利だろう。

『草の葉』の詩人ホイットマンの手になる『フランクリン・エヴァンズ』(1842)もそうした禁酒物語の一例である。物語は、田舎の孤児エヴァンズが、ニューヨークへ出て生活を始めたとき酒の誘惑に陥り、おかげで職を失い、妻には先立たれ、おまけに悪者の一味に誘い込まれて泥棒を働く。なんとか窮地を脱したものの、その後酔ったはずみに結婚した混血女性が、エヴァンズの心変わりや恨み、恋敵を殺害後、牢獄で自殺する、といった話が次々と書き込まれている。いかにもホイットマンらしくさまざまなエピソードがカタログ的に盛り込まれた、いささかセンチメンタルでグロテスクな作品である。ホイットマン自身、この小説は金もうけのために3日間で、しかも、アルコールの力を借りて一気呵成に書いたと豪語している。ただ、そうは言うものの、彼は後に、自ら編集する新聞に大幅な改訂を経たうえで、再びこの作品を掲載しているし、エピソードのいくつかは独立した短編として発表もしているから、必ずしもおごなりの仕事だとは言いきれない。それに、禁酒運動に関心を抱く文学者にしばしば見られることだが、ホイットマンの場合も、家庭内にアルコール依存者がいたようで、彼にとって酒のもたらす災いは決して他人事ではなかったのだろう。

ホイットマンはともかくとして、ときにプロバガンダと紙一重とも言えるべき書き物と、講演会や各種啓蒙活動が、いわば、メディア・ミックスを成し、禁酒運動を効果的に推し進めていったわけである。なかでも、講演者としてのみならず、その自伝(1869)が有名な人物にジョン・ゴフがいる。もともと芝居、歌というエンターテインメントの世界にいた彼は、酒で身を滅ぼしたことを改心し、持ち前のパフォー

マンスを武器に印象的な講演活動を行って、初めのうちはワシントン・ニアンとの連中とは良好な関係にあった。ところが高額な講演料をとり始めたころから両者の関係が壊れ、ゴフはますます過激なアジテーター/エンターテイナーへと傾斜していくことになる。

そもそも、禁酒(改心)体験談というのは共通のボタンを持っており、ある論者に言わせると、「地獄」(酒による没落)―「煉獄」(ワシントン・ニアンなどによる救済)―「天国」(禁酒活動家としての講演活動)という「ダンテ」的プロセスをたどるといふ。今日、AAの回復体験談(recovery narrative)の談話構造が、それと似通ったプロットを持ち、「Hi, I'm... I'm an alcoholic.」で始まる定式化された語り口調に従うことを考えると、そのボタンは、この種の語り口に共通の技巧、つまり、一定の印象、メッセージを聴衆の頭に刷り込むために必然的に要請される技巧として理解すべきかもしれない。

ゴフの語り口はときに扇情的ともいえるほどで、とりわけアルコール依存症に特徴的な「震顫譫妄」(delirium tremens)の描写を巧みに盛り込んだことで、「DTの詩人」の異名まで得ている。DTとは断酒後、72時間ほどして現れる震顫(手足、舌、眼の震え)と譫妄(幻視、幻聴)の症状を指し、たとえば、断酒3日目ぐらいから次々幻覚に襲われた患者が、床一面に散乱した自分の脳細胞を必死で拾い集めている姿などに顕著である。(邦山照彦『アル中地獄』)アメリカ開拓時代の町の名に、「墓石」「ゴモラ」などと並んで「DT」という名があったことを考えると、この言葉はかなり一般的なタームとして流通していたようだ。しかも、ゴフの講演では、酔っ払った父親が、2歳にも満たない自分の子供を暖炉に投げ込んで焼き殺すといった場面を演技力たっぷりに聞かせ、禁酒の勧めを聞きにきたというより、怪奇な話を楽しむために集まった聴衆を楽しませていたようである。

皮肉なことに、ワシントン・ニアンと手を切り、ますます俗受けするようになったゴフを待ち構えていたのは、ある売春宿で泥酔しているところを見つかるという結末である。ゴフは敵対陣営による謀略だと弁明したが、この事件は彼の汚点となって消えなかった。のみならず、実際、不摂生(酒飲み)の禁酒活動家は多く、後に、その種の活動家を皮肉った禁酒小説の変種が出回ることになる。

ところで、禁酒小説のほうに目を転じると、こちらのほうも基本のボタンが幾つか見られ、なかでも特徴的なことは、酒による墮落が不可逆的かつ漸進的に進行するものだという考えかたにのっとっている点である。アルコール依存を進行性の病ととらえる見かたは現代アルコール治療で有力な立場だが、アメリカにおけるそうした見かたの源流は、医師ベンジャミン・ラッシュにさかのぼる。彼は、ペンシルヴァニア代表として独立宣言に署名した当時のオピニオン・リーダーの1人だが、1784年に『蒸留酒の人間精神および肉体に及ぼす影響の考察』なる本を書いており、アルコール治療の草分け的存在だった。彼の考案になる「精神と肉体の温度計」は、健康と富が約束された節酒から、病、死、絞首台が待ち構える暴飲にいたるまでの間に、少量の醸造酒(ワイン、ビール等)がもたらす心地よい酩酊感から、蒸留酒(ウイスキー、ラム、ブランディー等)の世界へ踏み込んだために、はれぼったい目をして不快感を抱きつつ、喧嘩、いさかい等、さまざまな人間関係の悪化を招く様子が、体温計の目盛りになぞらえてわかりやすく段階表示されている。

ラッシュ流の啓蒙はその後、「不摂生海」のかなたに位置する「貧困大陸」と「完全禁酒海」に守られた「豊穡大陸」をコントラストにして作られた地図などに典型的に見られるように、視覚的にわかりやすく一般大衆を啓蒙するくふうが次々考案されている。とりわけ、ラッシュ思想の流れを反映しているのは、ナサニエル・カリエーによるリトグラフ『酔いどれ歷程』(*The Drunkards Progress*, 1846)である。この図版は、第1段から始まる階段状のアーチを左から順に男が上っていく図柄で、右端は最終の第9段。最初は友人との楽しい語らいを約束するグラス1杯のビールだったはずが、第4段では、「酔って騒々しくなっており」、頂上の第5段では「完全な酔いどれ状態」に到達。あとは下り坂を転がるばかり。貧困から友を無くし、犯罪に走ったあげく、最後には絶望感から自殺を遂げるプロセスをたどる。アーチの下には不注意の出火か、燃えている我が家を泣きながら子供の手をひいて逃げる妻の様子が書かれている。

この図式は、先ほどの『フランクリン・エヴァンズ』のプロットにもかいま見られたものだが、このジャンルの代表作は、T. S. アーサーの『酒場での

十夜』(1854) だろう。アーサーといえば、かつてワシントン運動のイデオログとしても活躍した人物で、1842年の『ワシントンたちとの六夜』はその代表的成果である。しかし、彼は、その後、道徳的説諭による禁酒運動の限界を感じ、立法措置による強制的禁酒へと考えを変えている。『酒場での十夜』はそうした彼の思想変化を反映して、酒の弊害がいっそう徹底して描かれている。この作品は年10万部ほどの割合で、20年間売れ続けた当時のベストセラーだったし、アーサー自身、40年代に出版された全小説の5パーセント以上を書いたとされる売れっ子作家であって、生涯100点近くの小説、パンフレットなどを書いている。

物語は、シダーヴィルというスモールタウンに新しくできた居酒屋兼旅館に時間の経過をおいて何度か投宿した語り手が、酒が原因で牧歌的で平和な町の人間関係が壊れ、漸進的に町全体が確実に崩壊する様子を観察して語る形式をとる。新時代のビジネスとして居酒屋を開業した男が、元の雇い人で今はアル中に身を落とした男の幼い娘を事故であやめてしまう。そのことに悩んだ妻は発狂し、ついには酒におぼれた実の息子に殺害される酒場の主人の話を中心に、酒が家庭崩壊、殺人、リンチなどを引き起こす様子がショッキングな口調で語られている。

過度な飲酒による人間性の崩壊を描くこの種の小説の常套手段として、表情が獣性を帯びてくることも特色のひとつとして挙げておくべきだろう。この小説でも、元来、性格のいい主人公や、だれにも愛されるにこやかな少年であった彼の息子が、語り手が町を訪れるたびに醜く変化する様子が克明に書き留められている。あるいは、より知られた例を引くなら、『アンクル・トムの小屋』(1852)でトムを結局は死なせてしまう残忍な主人サイモン・レグリーが酒好きで、彼が残忍さの度合いを増すにつれますます酒におぼれ、禁酒物語の特徴である漸進的な劣化と死へのプロセスをたどることを考えてみてもよい。母の愛による更生の努力もむなしく、「罪が勝利を収めた」時点で読者の前に姿を見せた彼の様子は、「手が異様に大きく、毛深く日焼けして節くれだっており、非常に不潔で、不快な長い爪を生やしている」というふうに、獠猛な飼い犬同様、野蛮な獣のイメージで終始描かれている。

この小説でおなじみのストウ夫人の父はアメリカ

禁酒協会設立にも貢献したライアム・ピーチャー牧師、「ふれるな、飲むな、商うな」の警句で知られる禁酒派の論客である。ストウ夫人もラッシュの影響を受けていたようだし、なにより息子がアルコール問題を抱えていたこともあり、アルコールに対する関心は早くからあったようだ。「サンゴの指輪」という短編では、プライドを傷つけることを恐れてだれも忠告しようとしぬアル中男性に、ある若い女性が助言して男を救う話が書かれている。

『酒場での十夜』はそのような当時のコンヴェンションを極端に利用して過激なまでの作品にしたて上げたわけだが、この小説に挿入されたジョージ・クルックシャンクの版画が視覚的に果たした役割も小さくはない。その種の挿画は、酒乱の夫による家庭内暴力や、酒場に入り浸る父を幼い娘が迎えに来る場面を描き、読者に感情的に訴えかけるのに大いに効果があった。家庭内暴力といえば、主人公が妻の頭を斧でかち割る禁酒小説も書かれており、そうしたコンテキストで、有名なポーの「黒猫」(1843)を読み解く試みもある。むろん、ポーとワシントン発祥の地、ボルチモアとの因縁は深いし、それになにより、ポー自身、死の直前、禁酒の誓いを立てつつ、泥酔状態で死を迎えたというゴフばりの皮肉な巡り合わせがあった。

ワシントン、ゴフと書いたついでに、ゴフと親しいある人物が、1841年「第二独立宣言、もしくは、合衆国ワシントン絶対禁酒協会宣言」なる文書を書いていることにも触れておこう。

「われわれは次の真理を自明のことと考える。すなわち、すべての人間は神によって禁酒家として造られており、一定の自然な罪なき欲望を授けられている。その中には、冷たい水への要求、そして幸福の追求が含まれる」

一読してわかるように、独立宣言(1776)のパロディである。ジェファソンの筆になる独立宣言では、すべての人間が神によって平等に造られていることと、「生命・自由・幸福の追求」という一定の奪われざる権利をうたっているが、この文書では、それが、飲酒—禁酒の枠組みのなかで換骨奪胎されている。

自由、解放の言説となれば、奴隷解放の体験記に触れないわけにはいかないが、そのジャンルの古典、フレデリック・ダグラスの『自伝』にも酒に関する

記述は多い。奴隷解放後、禁酒運動がウエットな文化の掃除をはかったとき標的となったのが黒人であって、比較的自由に酒が飲めるようになった彼らは、酒の害悪と結びつけられ、悪しき酔いどれ黒人として排斥の対象となった。禁酒運動家たちが酒を指して使う用語「デーモン・ラム」(悪魔の酒)に「ニガー・ジン」なる言葉が加えられたのもこのころである。その間の事情についてはこれ以上立ち入らず、ダグラスの本とゴフの自伝とが同年に出版されているという示唆的な事実を指摘することと、そもそも「酒に鎖で縛られ、デーモン・ラムに拘束された奴隷」という比喩を多用する禁酒物語の言説と奴隷解放運動とが密接に結びついていたことを述べるにとどめたい。

解放のディスコースといえば、むろん、もうひとつの運動に女性解放運動がある。婦人参政権運動家であると同時に、奴隷制度廃止論者でもあったスーザン・アンソニーがゴフの演説にいたく感動したと

いう事実に象徴的に表れているごとく、この運動もまた、禁酒運動と軌を一にする。1848年にはニューヨーク州セネカ・フォールズで有名な女性の権利のための集会が開かれており、会の終わりには『所感の宣言』なる文章が発表されている。この文章も、現実の不正を正すに至った経緯を述べた書き出し部分と男性の暴虐例を列挙したところが独立宣言のもじりになっていて、解放の言説に関し、間テクスト性の興味深い例を提供してくれている。

禁酒物語をめぐってはまだまだ色々興味深い点があるが、以上、概観したさまざまな事実を通して、19世紀アメリカの動きが新たな視点から透けて見えるとすれば、社会を映す鏡として禁酒物語を分析する有効性がかいま見られたことになるだろうと、まずは結論づけておきたい。

(大阪大学教授)